

開催地名：静岡県下田市	
開催日時	令和2年10月21日（水） 19：00 ～ 20：30
開催場所	下田市民文化会館 小ホール
語り部	鈴木 秀光 （宮城県気仙沼市）
参加者	下田市職員、関係機関職員 56名
開催経緯	当市では、近年大規模災害が起こっていないため、災害対応経験のある職員が少なく、災害の実体験を継承する機会が少ないことから、職員の大規模災害に対する防災意識の希薄化や、職員の災害時の対応に遅れが生じることが懸念される。そのため、今回行政組織に所属する語り部の講演を企画し、防災意識の向上を図ることとする。
内容	<p>（1）東日本大震災発生と気仙沼市の被災状況</p> <p>私は宮城県気仙沼市の職員で、現在は危機管理課で仕事をしている。気仙沼市は面積が333.36平方キロメートル、水産業と観光が中心の太平洋に面した市である。本日は東日本大震災について、私の体験をもとにお話ししたい。</p> <p>平成23年3月11日、14時46分頃に三陸沖で発生した地震は、マグニチュード9.0の大規模なもので、東北の太平洋側は津波による大きな被害を受けた。気仙沼市でも40隻以上の大型船が陸上に打ち上げられ、約3,000隻の漁船が流出・損壊した。テレビ等でご覧になった方もいると思うが、共徳丸という全長50メートル、330トンの船が港から800メートルも内陸に移動した。海から約500メートルの位置にある気仙沼向洋高校は、校舎の2階より上に行けば、美しい青い海と緑の松林が望める眺めのよい学舎で、周辺には冷凍工場や住宅が並び、沿岸部ではどこでも見られる風景が広がっていたが、津波はこうした沿岸の風景全てを根こそぎもっていった。そして強い勢いを保ったまま、校舎の4階にまで、津波は到達した。市内の浸水面積は18.65平方キロメートルで市内全体の5.6パーセントに及ぶ。気仙沼市での死者数は1,109人を数え、行方不明者も214人、震災関連死と認定された方々も109人いる。被災家屋は15,815棟にのぼり、これは市内全体の約41パーセントにのぼった。被災した事業所、従業員は8割を超え、大震災直前には74,000人いた人口は、今年の9月の時点で61,630人まで減少している。</p> <p>（2）震災の教訓</p> <p>大規模な地震と津波は想定外の試練をもたらした。浸水区域外と想定されていた市役所前の道路は瓦礫で埋まり孤立し、庁舎は浸水のため停電した。避難所では自家発電機が故障して使えないところもあり、市内で給油ができたガソリンスタンドは3か所のみであった。緊急車両が優先だとはいえ、通院や遺体確認、火葬等、一般住民の需要も無視することはできず、燃料の配給にも手間と時間を取られた。停電が市内全域で解消さ</p>

れたのは震災から2か月後、水道の復旧は3か月後であった。

救助物資については、震災直後から2日程度は市役所から各避難所に配送した。その後は市役所の税務課の職員が中心となり、旧青果市場を使用して荷下ろしと分別を行った。ある程度スムーズに分別できるようになると、ほぼ同じタイミングでボランティアの方々や市内の運送会社の支援、自衛隊の支援を得て、各避難所にシステマティックに分別・配送された。

平成15年の制度設立後、気仙沼市では初めて緊急消防援助隊の応援を受けた。震災翌日の3月12日の9時には先遣隊が到着し、13日の夕方には本体が到着した。最終的には9都府県、1,141部隊から4,317人の緊急消防援助隊の方々によるご支援を、3月12日から4月28日までの48日間に渡っていただいた。

市内の避難所は最大105箇所にとぼり、1日2食の食料を提供した避難者数は20,000人以上に達した。大規模な災害であったため、防災計画で想定していた避難所の他に、コミュニティセンターや寺、大きな家も避難所として機能した。市の職員だけでなく、地域住民や公民館長、議員などが率先して統率し、階上中学校には1,600人の避難者が体育館や各教室に避難した。学校では生徒や学生が強力な支援者であり、配食の手伝いなどで活躍した。避難所で不足していたものとしては、仕切りや床に敷くマット、着替え場所、シャワー、トイレ等の一般生活に必要な物品やスペースにとどまらず、病気の方の薬や、透析患者の対応等、命に係わる問題もあった。特に透析患者の方々への対応については、全ての患者に対して市内での対応ができなかったため、93人の透析患者については、千葉や秋田、山形、北海道への患者移送が行われた。

避難所の運営について言えることは、防災計画を準備しておくことの重要性はもちろんであるが、災害が発生したときに、その場で判断・決断・行動ができる人がいなければならないということである。そのような、住民のリーダーとなれる人材の育成についても、今後は取り組んでいく必要があると強く思った。



開催地より

豊富な写真や動画とともに、東日本大震災での実体験をお話しいただいた。大変参考となる内容であった。同じ海に面した市として、想定にとらわれることなく、市内全域で防災意識の向上に向けていきたいと思う。